

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520274

研究課題名（和文） イギリス 19 世紀における科学の制度化が文学に与えた影響について

研究課題名（英文） The Institutionalization of Science in the 19th Century Great Britain and Its Influence on English Literature

研究代表者 石倉 和佳（Waka Ishikura）

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：10290644

研究成果の概要（和文）：本研究は、イギリス 19 世紀に推進された科学研究や科学教育の制度化が、文芸作品やその価値判断にどのような影響を与えたかを考察したものである。19 世紀初頭のロマン主義期には、科学研究に見られる知的探求の力を、社会を変革する力として肯定的にとらえ、詩と科学の融合を詩的ヴィジョンとして追及することが様々になされた。本研究ではこの融合のヴィジョンが、コールリッジの批評やキーツの詩作においては屈折を余儀なくされたこと、英国学術振興協会の活動など科学研究の専門化の進行とともに、作品が生み出された時代の科学や社会の関心を文学の価値とは切り離して捉える傾向が次第に顕著になったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This study explored the ways in which English literary works and literary criticism in the 19th century had been affected by the institutionalization of science and scientific education in the Great Britain. In the early 19th century, many poets and authors of the English romantic area appreciated the intellectual power pursuing scientific researches as one that was realizing the amelioration of society, and they expressed the poetic vision of the unity of science and poetry in many ways. This study investigated various inflections of this poetic vision in the works of S. T. Coleridge and John Keats, in view of the development of the professionalism of science, for example, through the establishment of the British Society for the Advancement of Science. It also made clear that the evaluation of literary works had become dissociated from the scientific and social interests which however were actually integrated with those works.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 21 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
平成 22 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 23 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：英文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：ロマン主義、科学史、二つの文化、王立協会、想像力、科学教育、科学制度、イギリス教育制度、ヴィクトリア期

1. 研究開始当初の背景

19世紀前半におけるロマン主義の思潮には、詩的想像力と科学研究における知的探求の力を、ともに理念を形成し社会を変革する力として統一にとらえる思考が見られる。想像力は個人が感情を表現する際に発揮されるもののみならず、自然の現象やその現象の向こうにある原理を探求する際にも必要不可欠なものとしてとらえられ、詩を作る力と、科学を前進させる力とは、相補的な知的営みとされたのである。この点は、本申請者が平成20年度まで行ってきた科学研究費による研究で明らかとなった。

ロマン主義後期以降、詩的営みと科学的探究とを統一してとらえようとする思想の傾向と文芸思潮が、いかなる契機とともに C. P. スノーの言う人文的教養と科学的教養との「二つの文化」に分裂していったのか。この問題への認識が本研究の出発点にある。先行研究はほとんどない中で、科学研究の制度化や科学教育の整備が、文学に影響を与えていることを指摘する作業がまず重要と考えられた。イギリスにおける科学の制度化は、19世紀とともに始まったと考えるのが一般的である。17世紀以来の王立協会(Royal Society)では、社会的地位や資産によってメンバー構成がほとんど決められていた時代が長く続いた。19世紀に入り、科学研究の能力を重視する動きが盛んになると、王立研究所でのハンフリー・デイビーの活躍など、現代の科学研究にも通じる研究がされるようになった。科学的な有益性を最も重要な価値として1831年に創立された英国学術振興協会(the British Association for the Advancement of Science)の活動や、そのメンバーによる大学における科学教育改革、およびその他各種の科学団体の設立再編など

の活動は、ヴィクトリア期に向かう社会の価値観に大きな影響を与えたと考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、ロマン派第二世代を境に起こった科学の制度化が及ぼす影響が文芸作品への価値づけに複合的に表れていると考え、その具体的な様相について多元的なアプローチから考察した。科学の制度化の文芸への影響について、思想的、文学史的にアプローチする研究はこれまでほとんどなされておらず、科学研究から発生した文化的潮流について、文学研究の分野において体系的に考察されることは少なかった。

19世紀前半は、産業革命後の社会構造の変化により、社会的、思想的にさまざまな活動が見られる中、識字率の向上、印刷技術の革新、読者層の拡大など文学に関わる社会情勢にも大きな変化があった。その中で文学作品は、多様な散文スタイルや題材の開発とともに、詩歌においても趣味の変容が見られたが、長期的に見れば、文学作品の自律的価値を重要視する方向が強められていったと考えてよい。この文学作品の傾向と相補的な現象と考えられるのが、文学作品の価値が、科学的(博物誌、物質や光、人体と医学など)関心や科学的論理とは切り離されていく点である。この方向が定着したところに、「二つの文化」とのちに呼ばれることになる知的環境が醸成されることになる。

本研究で特に重視したのは、コールリッジが文芸批評においても科学的関心を取り入れて論じた点が、ヴィクトリア前期になるとすでに理解しにくいものとなっていると考えられること、キーツの詩作活動が、医師の免許制度と教育制度の整備が始まったちょうどその頃に当たっていることである。そし

てこれらに加えて、文学者の表現を文学的関心でのみ読もうとする傾向が、比喩表現に見られる論理性や科学的関心事を文学的修辞としてのみ理解する傾向と結び付いていることも考察の対象となりうると考えられた。

3. 研究の方法

本研究は、主に文献研究により行い、海外および国内での研究発表を行った。本研究で対象となる19世紀前半の科学文献は多岐にわたるが、再版されているものは購入し、そうでないものは大英図書館などで資料調査を行った。

4. 研究成果

本研究成果について、研究発表および論文を中心に報告すると以下のとおりである。

本研究テーマは19世紀前半の科学の制度化の推進を社会状況のなかの自明の現象として取り扱うものであるが、実際の成果発表ではより詳細にテーマを設定したものにならざるを得ない。それを踏まえてまず、キーツの医学ノートに注目し、そこに現れた血液循環のイメージが、キーツの作品の『レイミア』においてどのように修正、昇華されているかについて検討した。キーツの作品において、医学的知識は修辞のなかに散りばめられる以上の重要な働きをしていないかに見えるが、実際は肉体的思想とでもいうべき思想的な深みを見出しうるものであり、そこにキーツが科学の制度化と対峙した姿を読み取ることができることを指摘した。この研究は **BARS** の年次大会、**Romantic Circulations** で発表した。

すでに述べたように、科学の制度化が文芸の価値観に影響を与えたという視点から、19世紀前半における文学史、文化史上の変化をたどるといふ研究はこれまでほとんどな

れてこなかった。この点を鑑みて、科学の制度化によって科学的思考を含む詩的表現が、イギリス19世紀の文芸潮流から後退した点について、モンリオールで行われた国際学会 **International Colloquium 2010: The Glory and Fall of Scientific Poetry** で発表した。これはパリ大学およびモンリオール大学の企画したものであり、科学への関心が文学にどのように現れ、どのように消えていったかについて、18世紀から19世紀にかけて各国文学の状況から検討したものである。イギリスにおける科学の制度化は、科学的関心の現れた文学の性質を変質させたものとして重要であることが、発表を通して確認された。この発表成果は、プロシーディングとして2012年度に *Epistémocritique* に掲載される予定である。

また、日本英文学会では、デーヴィッド・ハートリーの連想心理の哲学が、コールリッジにおいてどのように理解され、重要であったかについて発表し、その点が当時の医学上の生命論とどのような関係があるのかについて紀要論文にまとめた。コールリッジにおけるハートリー思想の重要性をどのように理解するかということは、科学の制度化が文学の理解を狭めた例の一つとしてとらえることができる。ハートリーは意識がいかにかに生み出されるのかといった、現代でも解明されていない脳生理学領域までも含みうる哲学を展開しており、コールリッジもこの点の重要性を意識していた。しかし19世紀にミル親子によって、連想心理学説から物理学および生理学的関心が完全に消去され、それ以後ハートリーが正当に評価されない事態となっていることから、コールリッジのハートリー理解の解明が十分になされてこなかったことが明らかになった。

科学の制度化という社会現象が実際の文

学作品に影響を与えた跡を読み取る方法は様々であり、本研究では上記の他にコールリッジが好んだ'Surinam Toads'のメタファーを取り上げ、科学的思考と文学的修辞の融合の例として考察した。これは言語表現上の特質から文学的、科学的、といった判断を下すことに一定の疑義を呈したものである。

以上、本研究によって、ロマン主義期からヴィクトリア期への移行期において、文学の変質は、科学の制度化の進行によりその基盤が準備されていた点が明らかになったと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

①石倉和佳、「*Observations on Man* とコールリッジ思想のエートス」、『日本英文学会第 81 回大会 Proceedings』、査読なし、2009、110-112.

②石倉和佳、「コールリッジにおける'Surinam Toad'のメタファー」、『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』 13 号、査読なし、2011、123-134.

③石倉和佳、「『文学的自叙伝』にみる生命論—ハートリー思想の影響において」 『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』14 号、査読なし、2012、81-93.

④石倉和佳 「庭園史の中のロマン派詩人たち—「ボッカチオの庭」への道：庭園とフェミニンな詩人たち」、『イギリスロマン派研究』36 号、査読なし、47-49、57-60.

[学会発表] (計 5 件)

①石倉和佳、「*Observations on Man* とコールリッジ思想のエートス」、日本英文学会第

81 回大会、2009.5.31、東京大学駒場

②Waka Ishikura, "Keats and Blood: A Philosophy of Physicality," Romantic Circulations: British Association for Romantic Studies: 11th Biennial International Conference, 2009.7.29, Roehampton University, London.

③Waka Ishikura, "The Romantic Vision of the Unity of Science and Poetry and the Institutionalization of Science in England", International Colloquium 2010: The Glory and Fall of Scientific Poetry, 2010.9.15, Montreal, Bibliothèque et Archives nationales du Québec.

④石倉和佳 「コールリッジと'Surinam Toad'のメタファー」、イギリスロマン派学会第 36 回全国大会、2010.10.10、大阪大学

⑤石倉和佳 他 3 名 「庭園史の中のロマン派詩人たち」 イギリスロマン派学会第 37 回全国大会、2012.10.22、山梨大学

[図書] (計 1 件)

① Waka Ishikura, *Coleridge and the Age of Science: The Romantic Pursuit of Ideal Visions through Scientific Practice*. Book Park, 2009, 351pages

[その他]

ホームページ等

<http://www.shse.u-hyogo.ac.jp/ishikura/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石倉 和佳 (Ishikura Waka)

兵庫県立大学環境人間学部・教授

研究者番号：10290644